

—ラジオドラマ—

☆ドクター・スイサイド☆

多谷 昇太

〔登場人物〕

林満（44）…主人公、自殺願望者

錐最戸（キリモト・60）…精神科医（Drスイサイド）

故丹波哲郎的キヤラクター

荒木田光（36）…看護婦（兼受付係）、美人

男A（55）…自殺者

（※右以外のキャストについては本編以降の中編・後編においてその都度記す）

階段を上って行く人の足音、力なく、けだるげな感じ。

林（M）『ここは……いったいどこだろう。あたり一面白い雲のような、霧のようなもので覆われている。あやめも知らぬその霧の中で、マンション側壁にあるような鉄骨階段だけが……ずっと上に続いているんだ……どういうわけか俺は、力なくただそこを上っている……階段の踊り場二、三段ほどはなんとか見えるが、その先は上も下も、まっ

たく雲の中だ。これははたして……俗に云う天国に上る階段だろうか？俺は死んでしまったのだらうか？……しかしもしそうだったら……どちらかと云えば俺は、天国なんぞへ行くよりは、たとえ地獄であっても、むしろ下に降りたいのだが……しかしまるで誰かに導かれるように、勝手に足が上って行ってしまった。これはいったい誰の……なんの仕業だろう……か……ん?!上に誰か、いる!』

上方でドアの開く音、続いて階段の踊り場に出る人の足音がする。

男A（off）「いやあ、ありがとうございます。」

おかげ様で元気が出ました。先生によろしく」

荒木田（off）「はい、どうも。お大事にね」

男A（off）「はい。本当にありがとうございます。」

必ずまたおうかがいします。いやあ、先生の診察もありがったかったけど、あなたのような美人の看護婦さんのお顔を拝めるのが、これがまた嬉しくって（笑い）」

荒木田（off）「まあ。はいはい、またいらっしゃればお好きだけ……あつ、足もと!あなた、何

回もお辞儀をするのはいいけれど、うしろ気をつけないと階段から転げ落ちますよ。本当に(笑い)」
男A (off) 「いやあ、面目ない(笑い) じゃ、また。失礼します」

F I (フェードイン) で階段を降りて来る靴音。一段上の踊り場で林に気づき男A止まる。

男A 「あ、どうも……ど、どうぞお通りください」

林 「あ……いえ、あなたこそどうぞ」

男A 「(軽笑) そうですか。じゃあ」

F I からF O (フェードアウト) の靴音。すれ違った男Aを林が呼び止める。

林 「あの……ちょっとすいません」

男A 「はい、なんででしょうか」

林 「あの……ここはその、いったいどこでしょうか？ この上にはなにがあるんですか？」

男A 「なに……あなた、病院に決まってるじゃないですか。変な人だな、あんたも。精神科の先生のとこですよ。あなたもかかりに来たんですよ？……あ、わかった。あなたね、いまさら人前

をつくろう必要はないですよ。ご心配なく。私も患者ですから。いやあ、いい先生ですよ、実に。包容力があって、おもしろくて。きれいさっぱり私の悩みを解決してくださった。私はいま嬉しくて仕方がないんだ(笑い) まあ、とにかく、あなたも診察を受けてもらいなさい。よくわかるから。じゃ、私はこれで」

男A下に降りて行く、その靴音。踊り場二段ほど降りたところから男Aが再び声をかけてくる。

男A (off) 「あ、そうそう、忘れてた。ねえ、ちよつとあんた！ 先生が名医なだけでなく、看護婦さんもすごいシヤンですよ。こちらは心じやなくて、目の保養(笑い)」

F O (フェードアウト) の靴音。

林 (M) 『なに？ 精神科？……なんで俺が精神科にかからなければならぬんだ？ あの男の話はまるでわからない。ちえつ、看護婦がシヤンだとか云いやがる。いったいなにがなんだか……』

荒木田 (off) 「そこにどなたかいるんですか？ 診

察に来たのならどうぞ。用もないのにウロチョロしているのなら警察に通報しますよ」

林 (M) 『え？警察に？……それは困る。また職務質問などされたら嫌な思いを……いや、待て。いったいなにを云っているんだろう、俺は。すっかり頭がぼやけてしまつて……確か前に職務質問をされて……それから……ロープが見えて……』

荒木田 (off) 「なんか変な人ね。ドア、閉めますよ！」

林 (M) 『え？ドアを閉める？それは嫌だ。待つてくれ、俺を見捨てないでくれ……ちえつ、また。まつたく、俺はなにを云つてゐるんだろう？』

荒木田 (off) 「いいんですね？これでもう今日は診察終了ですよ」

林 「え？終り？……待つて！いま行きます！ドアを閉めないで！」

林、勢いよく階段を駆け上つて行く、その靴音。

林 (息を弾ませながら) いや、どうも……し、診察を受けに来ました」

荒木田 「ま、驚いた。すごい勢いで……それはいいけれど……あなた、保険証、持つてらつしやるの？

ヨレヨレの、ずいぶんラフな格好でいらつしやつて……保険証なければ診察受けられませんよ」

林 (M) 『え？保険証？あ、あるさ。ちよつと待つてくれ。いまあなたの目の前で出してやる。ちえつ、まつたく。人を頭から爪先まで胡散臭そうに見やがつて……待つてろよ、いまこうして尻のポケットから財布を取り出して……えーつと、ほらここに……ん？なんだ？この十万円ほどの札束は。なぜこんな大金を……そうだ……確か俺は有り金ぜんぶを貯金からおろして、車に乗つて、青木ヶ原樹海へと……それから首を吊つている……男の姿が見えて……そして俺は……』

荒木田 「ま、あるじゃない、保険証。(小声で) と、お金も。失礼しました。今日日世知辛い世の中ですからね、一応保険証の有無を確かめませんと(追従笑い) それならどうぞ、中へ……どうしました？ポーつとして表札など見つめたりして。変な方ね。もつとも変でなければうちへは来ないんだけど (軽笑)」

林 「あ、いや、ちよつと……この表札の名前、キリモトつて読むんですか？」

荒木田 「そう。金偏に佳、それに最高の最、それから戸棚の戸で、キリモト」

林「雖最戸、ですか。音読みすればスイサイド。英語の自殺……となりますよね」

荒木田「そうなりますかね。それがなにか？」

林「おたく精神科なんですよね？人を癒して、救う……」

荒木田「はい、おっしゃるとおりです。なにかご不満でも？」

林「い、いや、別に。入ってもよろしいですか？」

荒木田「はい、どうぞ。保険証お預かりします。(小声で) これさえあれば誰だって……」

林「なにか云われました？」

荒木田「い、いいえ。下界にいた時の癖がつい……」

林「え？下界？」

荒木田「い、いいえ、なにも云ってません(誤魔化し笑い) さあさ、どうぞ。保険証お預かりしたからにはもう逃がしませんからね。商売、商売(笑い)」

ドアが閉まる音。スリッパを出して履き替える音、看護婦がカウンター内に入って腰掛ける音等。

林(M)『これはどうだ、この部屋の中は……白一色だ。壁も天井も床も……看護婦の制服と帽子もだ。』

なんだか精神が失調しそうになる。カウンターの中で椅子に腰掛けて足を組んでいる、看護婦の足だけがやけに刺激的だ。それとあの絵……4号ほどのサイズで壁に掛けてあるやつ。背景が赤一色で……そしてその中央には……なんと、首を吊っている男の姿が！近づいて行ってよく見てみると、はて、この男は……どうも誰かに……』

荒木田「林さん！」

林(びつくとして) わっ、驚いた。お、脅かさなくてくださいよ。俺は、い、いや、私は気が小さいんだから……なんで俺の、い、いや、私の名前を知っているんです？」

荒木田「あら、ごめんなさい驚かせて。絵の前で固まっているみたいだったから(軽笑) お名前は保険証に載ってますから」

林「あ、そうか。し、しかし、それですよ、それ。この絵……いったいなんですか、これは。首吊りの絵なんて。縁起でもない！病院に、それも精神科の待合室に掛けるようなものですかね」

荒木田「先生のご趣味なんです。おかまいなく。それよりもこちらの問診表に記入してください」

林「趣味って、あんた(苦笑) いったいどんな趣味ですか。ちえ、まったく……いいですよ、いま書

きますよ」

林、カウンターに向かう。そのスリッパの音。カウンターの上面にバインダーを置きペンを走らす音等。

荒木田「あら、どうぞ、ソファの方で。お掛けになつてお書きください」

林「いや、いいです。立つたり座つたり面倒だ。この方がいい。あなたのその、素敵なおみあしも拝めるし」

荒木田「まあ」

林(M)「『まあ』と云つたあとしかし看護婦はこれ見よがしに大胆に足を組み替えて見せた。その際に見えた奥の色は……白だ。俺は異様に刺激されて生唾をグツと飲み込む。普段から、いや生まれながらずつと女つ気ゼロの身だつたとはいえ、ここに来て欲情すること甚だしい。どうも、どこか、なにかおかしい。これはちようど……抑制がまったく効かなくなるという、まるで、夢、の世界の中にいる時のようだ。俺は問診表を彼女に手渡ししたあと、カウンターに肘をついて、体をハスにして、立つたままで足を組む。まるでスタンドバターのプレイボーイだ。ふだん無口な俺とはまった

く違う、いたつて饒舌な男に化そうとしていた。看護婦の素足の、魔法、に魅せられた、いや、癒されたがごとしである……」

荒木田「ところで林さん、この下のほうのお名前はなんとお呼びするんですか？ミツルさん？」

林「そうです。満杯の満と書いてミツルです。ハヤシミツル。名は体をじゃやないですが、私の人生そのもののような名前です。行く手をさえぎる生い茂つた雑木、林に囲まれて身動きができない、八方ふさがりのような状態なんです。はい」

荒木田「そうなんですか。それは困つたもんですね」

林「ありがとう、そう云つてくれて……しかし実はその雑木、行く手をふさぐ木々というのは、私にとつては世間、人間どものことなんです。差別や罵り、イジメごころに充ちた、鼻持ちならない輩(うから)どものこと。私のまわりにはそういった連中が多すぎて……もう、そもそも見たくないんです！聞きたくない、関わりたくない、こんなやつらと。いっさい御免だ！」

荒木田「そ、そうですか。それはどうも。私も一応人間だと思しますので、そんな私が見えちゃつてすみません」

林「あ、いえ、とんでもない！誰があなたのような

方を嫌い、敬遠しますか？あなたがそんな連中の範疇に属するとは決して思いません。しっかりと自己を確立していらっしゃる方だとお見受けします」

荒木田「あら、お会いしてからたった5分くらいの間に、そんなことがわかりますの？もしかしたら私もあなたのおっしゃる、その輩（うから）かも知れませんかよ（軽笑）」

林「断じてない！私は嗅覚のようなものが発達しているんです。もっぱら群れ指向で、イジメの的をつくってはひとつに固まるような連中。自分が的になることをひたすら恐れて、強い者に付き、その意向のもとに無難に日々を過ごさざるべし、その意図のもとに無難に日々を過ごさざるべし、そんな連中はそもそも身体から毒のオーラが出ているんです。あなたからはそれは皆無です」

荒木田「まあ、それはどうも。何かあなたがここにいらっしゃったわけが分かるような気がします……：…：…そういったことは先生の方におっしゃってください。いま問診表を先生にお渡しして来ますからね」

林「あ、そのまま！動かないで！」
荒木田「どうなさいました？」



救いの女神、荒木田看護婦の脚……？

林「その組んだ脚を解こうとする、あなたの今のそのポーズ。ひたすら心が癒されます。しばしフリーズ……を、お願いできませんか」

荒木田「んまあ、なんということを。そういったことは今日日セクハラですよ。私をバーのカウンターにいるホステスと間違わないでくださいね」

林「間違えてません！癒しの、救いの女神と思うばかりです。あるいはこうも云わせてください。、ああ、不思議なこと！ここにはなんて素敵な人がいるんでしょう。人間はなんて美しいんでしょう。素晴らしい新世界。こんな人が住んでいるなんて！、と」

荒木田「シエークスピアの劇、あらし、の中のミランダのセリフですね。教養がありがたいのね」

林「いや、ありません。しかし今のセリフは私に於いては次のセリフの後に出了たものなのです。人間は泣きながらこの世に生まれてくる。阿呆ばかりの世に生まれたことを悲しんでな、の後に。あなたこそは愚昧な世の光です！邂逅した新生のしるしで……」

診察室のドアの開く音。 錐最戸医師（Dr スイサイド）が現れる。

錐最戸「ウオッホン（空咳）……」

荒木田「あら、先生……」

錐最戸「今のはリア王のセリフかね、林さん。大熱演中に失礼だが」

荒木田「すみません、先生。いま問診表をお渡ししよう……これです」

錐最戸「いや、いい。必要ない。この男の症状はよくわかってる。名前は林満、年令は厄年の44、住まいは車の中……車上生活の方、でしたな？私が直接お呼びしたクランケだ」

林「お、お呼びしたって……車上生活って……な、なんでそんなことを……」

錐最戸「まあまあまあ、そんなことはどうでも。」

それより林さん、トートウス・ムンドウス・アギト・ヒストリオーネム、世界は、つまり全人類は、これすべて役者として生きている、というリア王のセリフを、あなたはどう思うのかね？シエークスピア文学に詳しいようじゃから聞いたのだが……」

林「役者として生きている……その言葉は知ってましたが、しかし、我が身に当てはめたことはなかった。俺は……いい、いや、私は、その……世界

に、つまり世間に、虐げられるばかりで……身の廻りこれすべてがシビアで、強迫そのものなんですよ、私にとつては。とても演じるなどとは……」

錐最戸「そうじゃろ、そうじゃろ。受身オンリーの観客か、役者であることも忘れ果てた、被虐者になり切っていたのだろう」

林「せ、先生、じゃこの世は舞台ですか？演劇の中にあつて、そして私たち人間は、これすべて役者ですか」

錐最戸「うむ、そこだ！林さん。しかしここから先は診察となるので、こちらへ、診察室に入ってください。さ、どうぞ。荒木田君との間を引き裂くようにで申しわけないが」

林「荒木田……さんとおっしゃるのですか？こちらの看護婦さん」

錐最戸「荒木田光（ひかる）。どうです、いい名前でしよう。君がさつき云った、世の光、はまさに云い当て妙だったわけだ（笑い）じゃ、荒木田君、君のロミオをしばし借りるよ。さ、中に入つて」

荒木田「がんばつてね、ロミオ」

錐最戸と林、診察室に入る。スリッパの音やドアの開まる音等。

林（M）『こ、これは！これはいったい……』

M（効果音・エンヤ系の女性声による、驚きを示す、一瞬のフォルテ音のあと、滝の音を交えたような癒し系音楽をしばし背景にBGMとして流す）

林『……診察室に入った途端、俺は思わず心中で絶句してしまふ。室内と思つて入つたら、いきなり屋外に出たような錯覚を覚えたからだ。森林セラピーとでも云うのだろうか、緑いっぱいのおフィスルームがまるで森の中にいるようだ。そしてさらに、何よりの驚きが、部屋の向かい正面の壁がなくて、その代わりそこにさわやかな森林か、あいは滝のような光景と云うか、えも云われぬ空間が、そのまま部屋に隣接しているように見えることだった。なんと表現すればいいのか、一種この世の感覚では云い難い、清浄、という名のオーラが、そのままそこに現出したような感じなのである。心の底からリラククスできる空間が、この医師のコワークス空間が、眼前に広がっていた……』

錐最戸「どうです、林さん、この診察室に入るだけ

で心が癒されるでしょう」

林「は、はい……こんな部屋、いや、診察室は始めてです。あの正面の壁、い、いや、空間は？……あれはいつたいたいんですか。やわらかな光がいつぱいに広がっていて、あそこから滝のような音？……か、森林のオーラのようなのひしひしと伝わって来る。本当に……おっしゃるとおり、心から癒されます」

錐最戸「あれは私が特注したものです。名付けて、天国への入り口。他の病院や医院には絶対がない、わが錐最戸医院だけの専売特許です。林さん……実際に癒しの波動が、光が、いま君の身いつぱいに、あそこから注がれているのですよ」

林「……い、癒しの、ひ、光？……この、俺に？（突然胸がいつぱいになって涙ぐむ）」

(M・癒し系のBGM、クレッシェンド、デクレッシェンドでしばし続く)

錐最戸「……林さん、つらかったじゃろ、苦しかったじゃろ。よくここに来た、来てくださったな。心配しとったんじゃよ」

林「は、はあ、恐れ入ります。すいません、なんか

胸が突然いつぱいになっちゃって（涙ぐむ）……みつともない、女みたいで（苦笑）」

錐最戸「うむ、それはいい。診察室の中では男も女もない。好きなだけ泣いていいよ……いやあ、とにかくね、林さん。さきほどのことじゃが、私が云いたかったのは人生とは舞台、自分が生身で演じる芝居であるということを、それくらいの気概を持って、と云いたかったのだよ、わかるかね。ここへ来るまでの君のあの生き方では、つまり演技ぶりでは、たぶん舞台から降ろされていただろう。この大根、引っ込め！と演出家からどやされて、観客からブーイングを受けてな（笑い）」

林「はあ、そうでしょうか」

錐最戸「それはそうだろうが。君はいま男らしくないと云ったが、それを云うんなら泣く云々よりも、君の普段の生活ぶりではないのかね。どうかね！？」

林「生活ぶりと云いますと？」

錐最戸「さつき荒木田君に（おちよくなるように）、聞きたくない、見たくない、関わりたくない、こんなやつらと。いっさい御免だ、などと云ってたじゃないか。ゼンたい君は日光の猿か。世間から逃げまくる、そんな自分を男らしくないとは思わん

のか」

林「先生、逃げてはいませんが、私は好きじゃないんです、世間の輩（うから）どもが。見栄っ張り、自分勝手に、いつも他人を見下そうとする連中が。しかしそんな俺の波動が伝わるのか、私はいつも孤立無援で、一人きりです。私をさいなむ連中に事欠くことはありません。すればそんな世間を敬遠したくもなるうじやないですか」

錐最戸「しかしなぜそうなる？なぜ孤立無援だ？」

林「だからそれは……」

錐最戸「君が悪いからだよ、林君。だから誰も応援しないんだ」

林「お言葉ですが先生、なぜそう簡単に決めつけられるんです？私はある止んごとなし事情から車上生活者まで追い込まれた人間です。理由はどうか一度ホームレスに落ちてしまおうと世間の連中は白い目で見るのでしょうか。言いわけ無用で、世のスケープゴートとして罵り、さいなむだけだ。私の目からすればそんな世間はひとつに見える。さきほどのシェークスピアの、阿呆ばかりの世の中、！ですよ」

錐最戸「いや、少なくともだ、私は罵りもしなければさげすみもしないよ。君がそうなるにはなるだけ

の、なにごとか、のっぴきならぬ事情があったのじゃろ。あの天国の壁にいま映っているのは……あれはなにか……ヤクザ者らによる執拗な睡眠妨害、それとその他もろもろの生活妨害かね？」

林「えっ？」

M（再びエンヤ系の女性声による、驚きを示す、一瞬のフォルテ音）

林（M）『驚いた！天国への入り口と称するあの四次元的な空間、というか、場、が、いつの間にか映画のスクリーンのようになっていて、あるうことかそこに、この俺の普段の生活の有様が、そのまま映し出されているではないか！いま映っているのはアパートの部屋で眠る俺を、隣室から叩き起こしているヤクザどもの姿。どういう仕組みなのか、睡眠妨害を受けている俺も、それをしてるヤクザどもも、同一画面に映っているのだ。屋根を取っ払って、上から撮影しているがごとしである』

錐最戸「あれはひどいな、確かに。画面のテロップにはこれを何年も受け続けた、と出ているな」
林（腑抜けたように）あ、ほんとだ……テロップが

出てる」

錐最戸「(笑い) どうかね、林君、恐れ入ったかね」

林「お、恐れ入ったって……こ、これはいつたい」

錐最戸「まあまあまあ、そんなことはどうでも。

それより林君、君はどうしてあんなひどい目に会っているんだ？何かわけがあったか」

林「で、ですからそれは、止んごとき事情があったと……たぶん私のタバコの吸い過ぎで、イビキがうるさいとか……」

林(M)『などと上の空で答えながら俺は現れた画面に見入っていた。車上生活者におちぶれるまでの数年間、確かに俺は、同じアパートに住んでいた。チンピラどもから、執拗な睡眠妨害を受けていた。睡眠妨害のみならずもろの生活妨害を。たとえば通勤に使っていた俺の車のマフラーに石を突っ込まれる、アイドリングをMAXまであげられる、さらには自転車を何度でもパンクさせられる等々のこと。あげれば切りがない……眠れなければ誰が働けようか。俺の車上生活への転落は必至だった。しかしこんな仕打ちを受けるに至ったわけは実に下らぬことだ。口にするのも憂きつたい。ただ云えるのはアパートのオーナー始め、こいつらチンピラどもの親分など、世の金持ちや権力者

の意向に従わねば貧乏人はどうなるか……人権や法律など方便でしかない、世の不条理さを思うばかりである。彼ら権力者らの草履・下駄のような、チンピラどものあざ笑う顔を見てると、込みあげる怒りをおさえきれない……』

錐最戸「林君」

林「あ、はい」

錐最戸「君は、誰が見ていなくともお月さんが見ているよ、という言葉を知っているかね？またシェークスピアならぬ、我が国の西郷南州の言葉、人が見ていぬ時ほど我が身を正せ、という言葉を知っているか」

林「はあ、どこかで聞いた覚えはあります」

錐最戸「それについてどう思う？」

林「どう思うって……先生こそなぜそんなことを聞かれるんです？」

錐最戸「まず喫煙に逃げる弱さというのを、精神科医としては指摘したいが、そのみならず、おそらく、ああいったことをされる君の悪癖、弱さというものが他にもあったのじゃろ。云いたくなければ聞かないが、喫煙も含めて、そういう君のもろもろの悪癖を矯正すること。それが肝要だという意味で申し上げたのじゃよ」

林「いや、確かに、そ、それはその通りですが……
(居直るように) ふん……どちらがより悪いかの
問題ですな、それは。人には誰にでも欠点や悪癖
があるものです。しかしそれを捉え続けて世の的
とし、弾劾し続け、あまつさえ人を寝かせないな
どとは、これははたして人間のすることですか
!？」

錐最戸「それをしているのは世間じゃあない、すべ
ての人々じゃあない。君はだな、なにごととも一緒
くたに見過ぎる、断定しすぎる。それを精神科で
は統合失調症的性癖と云うのだよ。世間なんて人
間なんて所詮こんなもの、と断定していれば、突
き放しておれば、それで君自身は傷つかないで済
むのだろう。しかしね、林君、それではいくばく
もなく、君の居場所がなくなるよ」

林「え? 居場所がなくなる?」

錐最戸「そう、役から降ろされるということだ。そ
して人生が舞台であるとするならばだ、降役イコ
ール、それは死ぬということだよ」

林「えー!? 死ぬ!? 俺がですか……自殺でもしますか
(笑い)」

錐最戸「そうだろうな。私ならむしろそれを推奨す
るね。演出家の言葉で云うならばだ、この大根!

へッポコ役者め、引つ込め! 顔洗って、演技を修
業し直して来い!……とでも云うだろうな」

林「先生……お言葉ですがね、いまのは医者の方の云う
ことですか。ましてここは精神科でしょうか? 俺が
おとなしい一方で、怒らないとでもお思いですか」

錐最戸「お、それそれ、それを待っていたのじゃよ、

林君。君の顔に生気がもどって来た。いやね、林
さん、あの画面からは被虐の体験による、君のく
すんだオーラばかりがもつぱら伝わっていた。演
技もへつたくらもない、負け犬そのものだ。あれ
ではね、ちよつと私としても診療のしようがなか
った。私の言葉も身で聞けないだろうし、いまの
は謂わばショック療法だ。かつて使っていた電気
椅子がわりじゃよ(笑い)」

林「ワハハはないでしょう……いいですよ、もう。
俺はもう、帰りますよ。金はちゃんと払いますか
ら。じゃ……」

林立ち上がる。その椅子の音。

錐最戸「まあまあまあ、ちよつと待って。まだ
立ってはいかん。ほら、ほら、掛け直して。癩癩
を起こさないで……」

舌打ちして林が椅子に掛け直す声と音。

錐最戸「いや、林さんね、気を悪くしたかも知れんがこれが私の医院の治療法なんだ。ほんとだよ。さきほどの待合室での荒木田君ね、彼女の色香もそのひとつだ。じっさい彼女の脚を見て癒されること、また元気を取りもどすこと、大だったろう？

あれは私が仕込んだ看護婦としての責務だ(笑い)もつともあまり効き過ぎてもいから私が介入したがね(笑い)」

林「はあ、そうですか……そうだったんですか。すいません、つい痲癩を起こして」

錐最戸「いや、それはいい。で、改めて云うがね。

実は自殺しろというのは、私がクランケに云う決め言葉なんだ。一度死んで生まれかわれということだよ。わかるか？」

林「一度死んで……生まれかわる……」

錐最戸「そうだ！林君、君ね。人生が舞台で世の中の人間が役者なら、そこにはおそらく各自各様のシナリオがあつてしかるべきだ。そのシナリオを忘れ果てて、あまつさえ自分が役者であることも忘れ、舞台の舞台であることも忘れてしまう。挙

句ただ身の不幸を嘆いている、というのでは本末転倒だ。どころかとんだ喜劇だ。林君、君は喜劇役者に転向したのか？」

林「き、喜劇役者？(笑い)先生、喜劇どころか悲

劇の最たるもんです。みつともない悲劇ですがね」錐最戸「だから……そこだよ。我々上の者からみていると……あ、いや、もとい、私を観客か、演出家とするならばだ、自分が役者で、ここが舞台であることも忘れ果てた者ほど滑稽なものはない。何やっとなじや、ありや、てなもんだよ。わかる？」

診察室のドアをノックする音。続いて開く音。

荒木田「先生、すみません。そろそろお時間です。

林さんのご親戚の方からお電話で、もう帰らせてほしいとのことです」

錐最戸「あ、そうか。それでは仕方がない。林さん、

この続きはまた今度だ。必ず来給えよ」

林「え？また今度……そんな。もう少しお願いしたいんですが……そ、それと看護婦さん、親戚って誰ですか？私はおよそ誰からも見放されている身で、みんなの鼻つまみ者で……私の居場所など知る人はいないはずですが」

荒木田「さあ、誰だったでしょう。うっかり聞きわすれました」

林「そ、そんな」

錐最戸「まあまあまあ、そんなことはどうでも

それより林さん、最後にシエークスピアの名言を三つほど披露しよう。その一、悪口を云われて我が身を正すことの出来る人間は幸せと言うべきだ

その二、(叱るように) お前の光は、今、何処にある！その三、例のあの有名なやつだ。トウビイ・オワノットトウビイ・ザツツザクエスチョン、生きるべきか、死すべきか、それが問題だ。林さん、あんたならこの三つを必ずできる。必ず名役者になれる。私はそう信じている。そして最後に……必ず、死ぬんだよ。死んで生まれかわれたら、必ず、必ず、またおいで。じゃ、荒木田君……」

荒木田「ロミオ、こっち」

林「ロ、ロミオって……」

荒木田「いいから。連れてってあげる」

荒木田看護婦入って来て林を誘い連れ出そうとする音
(スリッパや椅子の音等)。

林「せ、先生、ど、どうもありがとうございました」

錐最戸「いや、どういたしまして。あ、そうだ、荒木田君、診察券をお渡ししておくように」

荒木田「はい、先生。林さん、もうお辞儀はいいから……こっち！」

二人出て行く音。

荒木田「林さん、実は本当に時間がないの。あなたの地上の環境が風雲急を告げて……あ、じゃなくって、お、表の天気が悪くなつて来て、もう今すぐお帰りくださいね。はい、これラブレター、じやなくって診察券ね(艶笑)用意しておきました。じゃ、受け取って、はい、それからこっち、靴履いて」

林「そ、そんなに急がせないてくださいよ。追い立てるみたに」

玄関のドアに向かうスリッパの音。靴を履く音等。

荒木田「追い立てはしませんよ。ご自分で表の空模様見てくださいよ。ほら。ドア開けるから……わ、すこい風！」

ドア開ける音、途端に吹き込む風の音。

荒木田「林さん、早く出て。書類が風で飛んじやう」
林「はい、はい、出ますよ。いそがしいな、もう：

…」

靴を履いて階段踊り場に出る音。風の音。

林（M）『表に出て驚いた。これで何度目か知らないが……看護婦の云ったとおり天気が激変していて、まわりの雲が暗雲となり、カミナリさえ鳴り出していた。手すりにつかまなければならぬほど風が強くなっている。しかし雲の向こうは相変わらず見れない。帰ると云ってもいったいどこへ行けばいいのか。とにかく下に降りればいいのか。せわしさのなか必死に笑顔をつくって、ドアを半開きにして見送ってくれている荒木田看護婦に、来院の前にすれ違った男と同じことを云う。風に負けないよう大声で』
林「ありがとうございます。先生の診察は身に沁みました。必ずまた来ます。あなたにまた会いたい」
荒木田「まあ、はいはい、また来てくださいね。バ

イビー」
林「バ、バイビー。じゃ……」

階段を下りて行く靴音。風の音。ゴロゴロ云う雷鳴。

林（M）『実にすさまじい光景だ。上空のカミナリ雲の真っ只中を行く気がする。最初の踊り場まで降りたときついにピカツと雷鳴が鳴った。音も光もすさまじくすぐ近くで発生したような気さえする。しかしそれより何より肝を冷やされたのが、雷光で一瞬雲の間から見えた足下の光景だった。なんと、地上ははるか下、何千メートルも下にあるのだ！途端に俺はその場にうずくまって一歩も動けなくなる。俺は立派な高所恐怖症だった。どうすればいいのか、また医院に戻るうか、戻ったら入れてくれるだろうか、などと逡巡するうちに階上から声がかかった。荒木田看護婦だった。まだ見送ってくれていたのだった……』

荒木田「どうしました？林さん。うずくまったりして」

林「こ、こわい、怖いんです！こ、こんなに高い所にいたなんて。俺は……高所恐怖症なんです！」
荒木田「まあ、男のくせにだらしがない。待っててく

ださい。いま行きますからね」

ドアを閉めて看護婦が階段を降りて来る靴音。風音。

林(M)『あ、ありがたい。荒木田さんが来てくれる。

それだけで恐怖が癒える気がする。それと……吹き上がる風で荒木田看護婦のスカートがまともにもくれ上がった。白のシヨーツ姿がまともに見える。思った以上にきわどいV字カット、絶景だった。足下の光景とどちらが絶景か……』

荒木田「まあ、だらしない、林さん。こんなにふるえちゃって。はい、私につかまって。途中まで送ってあげる」

林「お、送るって……こんな高い所から」

荒木田「すぐ着きますよ。ズーと降りるわけじゃないから。あ、あんまりしがみつかないでくださいよ。変なところに手をまわしちゃいけません」

林「すいません、うっかり手が腰にまわって……あ、荒木田さん、あなたに支えられていると身体があたりたたい。先生の部屋のあの壁と同じで、心がやすらぎます」

荒木田「どういたしました。あの時のお礼です」

林「え？あの時？……」

荒木田「い、いいえ、何でもありません……それよ

り林さん、ほらお迎えのサイレンの音が聞こえて来ましたよ。私はここまでです……じゃあ先生と必ず待つてますからね。こんどこそ本当の、バイビー(艶笑)」

林「え？サイレンの音……」

風と雷鳴が、パトカーの鳴らすピーポー音に変わって行く。

—以下、続く



たくましいDr. スイサイドのイメージ？



「また来てね」 荒木田看護婦より